

マルコによる福音書 9:42～50

「命を失わないために」

2025年5月4日(主の日)

藤沢北教会牧師 長倉基

大きな石臼をおもりにして海に投げこまれてしまう方がましである、片手を片足を切り捨ててしまいなさい、片方の目をえぐりだしなさい、とは大変物騒で、おそろしく、とうてい受け入れられない、理解しがたい言葉です。もちろん、本当に手を切り落としたり、海に沈めたりするなどということは実際にはしないわけですが、ではなぜこのようなことを主イエスはおっしゃるのか、こんなことを言うから教会が世の中に受け入れられないのだ、と怒りすら覚える言葉ともいえるかもしれません。どうしてこういう言い方を主イエスがなさったのか、それはわたしたちにはわかりませんが、主イエスがここでおっしゃることを理解することはできると思うのです。そのために、ここできかなければならないことは、「つまずき」ということ、そして「命」ということだと思うのです。

本日の箇所は、「わたしを信じるこれらの小さな者をつまずかせる者は」という主イエスの言葉で始まっています。「これら」というのですから、小さな者とは、ここまでの話にでてきた人のことです。一つには、37-38節にある子供のことでしょう。「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は」父なる神を受け入れるのだ、と主イエスはおっしゃいました。子供とは、人に頼らなくては生きていけない、力のない存在です。弱く小さい子供のような者を受け入れなくてはならない、つまずかせてはならないのです。そこに続く話しに、こういう人がでてきました。主イエスに直接従う自分たちと同じような弟子ではないのに、主イエスの名前を使って悪霊退治をしている人がいました。弟子たちは、勝手に主イエスの名前を使い、まず主イエスに従いなさい、と言っても従わないので、やめさせようとした。勝手に先生の名前を使ってはいけない、と。けれども、主イエスは、そのままにしておきなさい、とおっしゃった。つまり受け入れなさい、ということです。この人は、主イエスのことをよく知りもしないのに、「イエスの名前によって命じる。悪霊よ出ていけ」と言ったら悪霊がでていったので驚いて喜んでそういうことをやっていたのです。信仰理解の浅い、信仰がなにかよくわかっていない人ということで、わたしたちはこのような人のことも小さい人と呼ぶようになりました。こういう人たち、つまり、主イエスにすべてを従ってついてきている、弟子といっても何の問題もない自分たちにはとてもおよばない人たちを小さい人と呼ぶのです。子供のように弱く、人に頼らずには生きていけない人のことを受け入れうことは比較的簡単かもしれません。わたしたちは弱い人を助けずにはられませんし、助けられたことが神の恵みだと気づいてくれれば信仰にも導かれるだろう、とやや楽観的に、おおらかに受け入れる事ができると思うのです。けれども、信仰理解が浅いと思われる人のことを受け入れるのはなかなか難しいと思うのです。「教会に来てみたらみんな親切なのでクリスチャンになりたいです」と言われても、はいそうですか、とは言えませんし、「礼拝堂にくと癒やされます～」と言われても「で

は洗礼を受けましょう」とは言わないわけです。

ここで、この「小さい人」という話しはどこから出てきのかということを思い出してみます。もともとは、弟子たちが、旅の道々、誰が一番偉いか、ということを議論してたところから始まったのです。「偉い」かどうかなど普段考えない、というのであれば、「誰が一番良く分かっているか」ということでもいいと思います。聖書について、信仰理解について、信仰生活について、「自分が一番分かっている」、あるいは「あの人はよくわかっていてすごい。わたしはだめだ」、そういうことをわたしたちは考えてしまう。誰が一番信仰深いか、誰が一番ちゃんとしているか、ということでもいいと思います。わたしたちは、そんなことばかり考えているとすらいってもいい。そこで誰が一番偉いか、一番わかっているか、一番ちゃんとしているか、と考えることはつまり、偉くない人、分かっている人、ちゃんとしていない人をいやおうなしにつくりあげることになります。気づいてか、気づかないうちにか、誰かを小さく見下し、その人を「小さな者」にしているのです。「あの人はだめだな」「困った人だな」と、自分が偉くなったつもりで、相手を見ている。主イエスは、そんな私たちに向かって、「小さな者をつまずかせてはならない」とおっしゃるのです。

そこで、「つまずかせる」とは、どういうことでしょうか。これは、信仰をもって歩んでいた人が、何かのきっかけで倒れて、信仰の道を歩めなくなることです。教会では「牧師につまずいた」「教会につまずいた」と言ったりしますね。歩いていて段差に引っかかるように、信仰の歩みを止めてしまう。まっすぐに歩こうとしている人、いえふらふらとでも歩いている人の足をひっかけてころばせることです。そこでわたしたちは、つまずく、とは教会に来なくなること、礼拝生活をやめてしまうことだと考えます。しかし、それは表面的なこと、目に見える部分にしか過ぎません。今日の箇所は新共同訳聖書では「罪への誘惑」という小見出しがついています。実は今日の段落には罪ということばは一つもでてきません。小見出しをつけた人が、つまずかせるとは、罪へと誘うことだ、と理解したに違いないのです。信仰生活につまずいた人が悪いことをする、ということではありません。罪とは、神様から離れてしまう、ということです。つまずく、というのは牧師や教会員が、ある人が期待するような立派な人間ではないことがわかって教会から離れたとか、ちょっとした不用意な言葉をはっしてしまって傷ついてこなくなった、などということではありません。そのようなことだとするならば、相手の顔色ばかりを伺う教会、礼拝になってしまうでしょう。配慮がある態度、言葉を用いることは大切なことですが、相手の機嫌を損ねないか、ということが一番にきてしまうのも違うと思います。もし、そうならば、何もしないことが一番いいということになってしまいます。何もせず、何も話さなければ、傷つけることもないでしょう。主イエスはそういうことを考えておられたのではないことは明らかです。そうではなく、つまずかせる、とはその人を受け入れなかった、救いを伝えることができなかった、ということです。ちゃんとしなさい、よく理解しなさい、という前に、神はあなたにも手をさしのべておられる、と招き、受け入れなかった、それがつまずかせる、罪へさそう、神から離れさせるということです。

もう一つ頭においておかないといけなことがあるあります。福音を伝え、小さい人を受け入れるのは教会の責任だということです。主イエスは教会に天の国の鍵をお預けになりました。個人ではないのです。たしかにつまずきというのは個人が直接の原因となることが多いかもしれませんが、けれども、そうであればその人のことを嫌いになればすむはずで、教会から出ていってしまう、というのはやはり教会全体のことがらなのです。

それでもなお、罪は罪です。神から離れることは決していいことではありません。その罪を正当化することは絶対にできません。「仕方がないね。個人の自由だから」とか「あの人はあわなかった」などでは済まされない。あるいはきっかけになった人を、まるで自分には関係ないことのように「あの人のせいだ」などということも赦されないのです。つまりいたという方も、誰かに不本意なことを言われた、あるいはどう見てもその人は悪くない、そういう場合であっても、出ていくことが正当化されるわけではないのです。だからこそ、その罪と戦わなくてはならない。主イエスご自身が戦われたのです。

ここで少し、本日の箇所全体の流れを確認しておきます。このつまずかせる話のあと、自分がつまずく、自分の体のある部分によってつまずいてしまうことへの警告をなさいます。そして、そこで「地獄に投げ込まれるよりもまだ。地獄では火が消えることがない」という言葉から、次に火ということば、人は火で塩味をつけられる、という話に展開します。そして、塩気がない塩は役に立たない、自分自身に塩を持ちなさい、という話になります。出てきた単語から連想のように進んでいきます。つぎつぎと話が飛んでいるように聞こえるかもしれませんが、主イエスは思いつきで話されているのではないと思うのです。

さてそこで、つまずかせる、ということころから今度は、主イエスは問題の自分のつまずきについて語られます。手が、足が、目があなたをつまずかせるなら、それらを捨てなさい。地獄に投げ込まれるよりは、それらを失ってなお命を得る方がよい、そうおっしゃいます。ここで主イエスがおっしゃることは命を得る、ということです。神のもとで命を得る、それにかえられるものはないのです。神から離れたところ、そこには命はないからです。地獄というのは、ぐつぐつ池が煮えているところに投げ込まれたり、みつかると思えば棍棒でなぐられる怖い鬼が歩き回っていたり、ぼうぼう燃える炎に焼かれて熱い思いをする、そのようなところではありません。地獄とは、神がおられないところです。そもそも、わたしたちは神がおられないけれど、かといって地獄でもない、なにもない場所がある、とおもっている節があります。それは空想でしかないと思います。命の神から離れれば離れるほど命は失われていきます。全く命のないところ、神から最も遠いところを地獄と呼んでいるにすぎないのです。ですから、悪いこととして死んだら行くところ、とか信じないで死んだら行くところ、などというおとぎばなしではありません。神から全く離れてしまった人間がなにをしたか、何をしているか、争いの亡くならない歴史と現在をみれば、地獄がどのようなものかすぐにわかんと思います。ハイデルベルク信仰問答は、その最初第一問で、信仰者が生きるにしても死ぬにしても唯一の慰めが、わたしたちがキリストのもだということだと告白したすぐあとに、この慰めに生き、そして死ぬには何を知る必要がありますか、と問うて、こう答えます。第一に、わたしの罪と悲惨がどれほど大きいか。そこから

どうすれば救われるか、とそのすくいのにどう感謝すべきかと挙げます。そして第3問から人間の悲惨さを語ります。神の御心に生きることができない悲惨をなげくのです。罪を嘆く、神から離れた地獄に生きざるを得ない自分の罪の姿を嘆きます。決して他人ごとではありません。ほんの80年前を知るだけでもわかるはずです。今の自分だって、神を全く知らなければ、そういう世界にまきこまれるならば、いったいどのように生きるだろうか、時に考える必要があるのではとすら思います。

神に救われ生かされる命を主イエスは問題になさいます。命はあってもなくてもいいようなものではないのです。だからつまずかせてはいけないし、つまずいてもいけない。体の一部を失っても神がないところではなく神の命があるところを生きる方がいいにきまっているのです。この命の大切さを思う時、この表現は、大昔の人にわかりやすいように脅しのように切り落とせ、えぐりだせ、地獄に投げ込まれる、という刺激的な言葉を使った単なるたとえだ、などと単純なことは言えなくなると思うのです。ある人がこういいました。『『それを切り捨てなさい』という言葉は文字通りに取るべきではないが、真剣に受け止めるべき主イエスのご命令です』、と。神の国に入れていただく、まことの命に生きるために、他のすべての良いと思われるもの、自分に必要と思われるものを犠牲にすることができると。つまずかせ、つまずき、命から離れることをどれほど深刻なこととして受け止めているか、問われる思いがします。

そこで、主イエスは地獄の火から「人は皆、火によって塩味を付けられる」と話をさらにおすすめるになります。すこしわかりにくいかもしれませんが。レビ記には、すべての穀物のささげ物には塩を絶やすな、と記されます。契約の塩を献げ物から絶やすな、と。そしてその献げ物を燃やすのです。パウロはコリントの信徒への手紙一にこのように記しています。「かの日が火と共に現れ、その火はおのおのの仕事がどんなものであるかを吟味します・・・火の中をくぐり抜けて来た物のように、救われます。」火は神の裁きであり、また同時に試練でもあります。火で焼かれておわるのではなく、試練の火によって塩がつけられた味のある弟子となるのです。けれども、改めて思うのは、地獄の火にやかれたならば、もうおわりなのではないだろうか。けれども、わたしたちは地獄に行くことを心配する必要などないのです。ハイデルベルク信仰問答は先程の罪の悲惨のを第一部として第3問から始めますが、とても短い、問11まで9問しかありません。けれども、その後の第二部、どのように救われるか、の方が遥かに長い、問12から問85まで実に74問です。主イエスの救いが、主イエスが与えてくださる命がわたしたちの罪をはるかに凌駕するのです。

この救いとはどのようにして行われたのか、それは主イエスご自身が、神から最も遠いところへ地獄へとわたしたちのかわりに行ってくださったということです。「わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と十字架にかかってくださった。しかし、その死、地獄で与えられる死に打ち勝つ命をもって復活してくださったのです。神から最も遠いところへ行ってしまふことの悲惨さから救おうとなさるのがわたしたちの神です。「あんなところには行ってほしくない、わたしのところへ、まことの命に生きるためにわ

たしのところへ戻ってきなさい、あなたの命を滅ぼすためにつくったのではない、生きるためにつくったのだ、」と神はわたしたちを招いてくださいます。地獄の表現は 神の御前から最も遠いところであり、ただ恐怖を煽るのではなく、救いを思い起こす、主イエスが与えてくださった命への招きなのです。けれども、残念ながら言っただけでは理解しないのが人間であり、場合によっては地獄を見てもなお、神へと立ち返ることがないのがわたしたちなのかもしれません。けれども神はそれでもあきらめずに、御子を送ってくださいました。わたしたちはもはや、この主イエスの命をいただいています。この後の聖餐でこのことを味わうことにもなります。小さいものを受け入れ、また自分自身が小さ者、主に受け入れていただいた者であることをもう一度知り、主イエスが与えてくださった命の中を歩み続けていと思います。